



牛島義友

《聞き手》 津守房江

津守 きょうは、先生に過去を振り返ってのお話をお聞きしたいと、楽しみにまいりました。と申しますのは、先生はいつも前進的でいらっしやあって、過去を振り返ったお話など、うかがったことはありません。お書きになったものもないように思いますので。

牛島 いや、振り返っても何も見えないように、何だけど……。いつ頃から話しましょうか。

津守 まず、生い立ちなどからでも。

牛島 えっ、『幼児の教育』の話じゃないの。(笑)

津守 先生ご自身の生い立ちや、子ども時代のことから、『幼児の教育』の問題にまで展開して、お話しただければと思います。この雑誌が創刊八十周年ということですので、先生のお話からおのずと八十年の流れが浮んでくるのではないかと思います。

子どもの頃

——苦手だったこと——

牛島 まあ、生い立ちから幼児の教育の問題にまでという、間接には私も幼稚園に行ってたということですね。今から七十年前ですね。ちょうどその頃長崎にいたんですよ。長崎のYMCAがありました。そこで、そのキリスト教幼稚園に通いましたよ。まあ

児童研究と保育 (3)

二年間ぐらいね。

津守 キリスト教に関係がおりだったのですか。

牛島 ええ、親父が教会の牧師だった。幼稚園では、砂絵のようなもの、あの糊をつけて砂をつける。そんなものとか、だいたい今やっているようなこと、ものを作ることなんか色々ありましたね。スキップなんていうのもありました。あれは苦手でね。(笑)

津守 そうですか。

牛島 あれね、あれは今から考えてみると運動機能がひどく悪かったんですね。スキップが苦手で、少し大きくなって、小学校に行つてからは、木馬(飛び箱)を飛ぶのが苦手なんですよ。飛び越すのに、手をついてから飛ぶという、そういうコントロールがうまくいかないんだ。だからしまいには、手をつかないで飛び越したりしてね。いわゆる「微細脳損傷」という、あれに該当するんですね。

津守 そうでしょうか。

牛島 それで細かい器用な運動は、やっぱり出来ないんですね。絵を描くなんていうのもね、ひどくそんざいなんです、早いですけれど。幼稚園の年齢だったかな、教会の日曜学校で、昔よく形だけ印

刷してあって、盛り上っていて絵の具で塗るようなものを、宣教師がやらせてくれたんですね。それを私がやると、にじんで汚なくて使いものにならないんですよ。(笑)早いのでたくさん塗りつぶしちゃって、妙な顔をされたっていうことを覚えてますよ。

まあ後になって、色々な子どもの指導をするようになって、振り返って見ると、なるほど、自分はいかにタイプだったんだと思うんですよ。原因はよく分らんけど、生れたとき、えらい大きかったと母親が言っていましたね、だいが苦しんだでしょうね。まあ、そりゃあ、こっちが勝手に考えていることであってね……。

津守 先生がご自分でそうとらえていらっしゃるということでしょうね。

牛島 運動機能とそれから言語がね、やつぱりよくないですね。算数と国語とくらべると、算数は好きだったんですよ。国語は嫌いでしたね。その中でも特に嫌いなのは、書き取りなんかですね。字を正確に覚えることが、ひどく苦手だったんですよ。

それに、きれいに書くということもね。あの頃は毛筆で書かされたんですよ。ああいうことは、ひどく苦手ですね。暗記することも苦手です。

そういうものがあるから、子どもの頃は出来ない子どもでした。成績はまあ普通ですね。成績の方から言えば、年齢が上になるに従って、だんだんよくなった。中学校もどうやらはいった。うちの弟なんかは違っていてね、中学の時は一番で入学した。私はそうはいかない。しかし、四年生で高等学校(旧)にはいったわけですが、その頃になると、どうやら追いついてくるわけですね。

津守 旧制中学は五年卒業ですから、四年で高等学校に入学されたのは大変ですねえ。

牛島 福岡の高等学校にはいって、やつぱりいい順位だったわけですよ。一番でなくて二番くらい。あとも同じで、初め悪くてもあとでよくなる。自分の本当の好みに合った、適性に合ったことだけさせれば、わりとま

あ出来たんですよ。万能的に何でもうまくいくということは、出来なかったですね。

だからそういう子どもに対して、これは出来ない子どもだなんて見ないで、むしろ将来に完成があると認めていくことが出来たんですね。そのような指導を考えますね。

はじめての著作の頃

牛島 それで最後まで今でも一番苦手なのは、字を書かされることね。はじめて本を書いたときなんかね、文章も下手だし、本なんて書けないだろうって、思っていましたよ。波多野(元亮)君なんて逆でね、実に巧みに表現出来る。字の下手なのは私に似てたけど。(笑) はじめて『青年の心理』を書いたのは、だいが年がたってましたけど、もうその頃には波多野君は沢山本を書きましたよ。

私はなかなか筆が進まないで、ごつごつした文章です。それから後になって、いくらか慣れてきてね、割にすら書けるようになったわけですよ。しかし自分で筆

を持って書かせられると、何回も書き直さなきゃいけないし、面倒くさくてしょうがないですね。それで口述の方がいいんですね。家内も協力してくれたし、その他の助手の方も書いてくれました。僕がしゃべることを書いてもらおうと文章になりましたね、あとで修正がいらぬ。まあそれが一種の特技かもしれない。

津守 『青年の心理』は昭和十五年に出版されたのですが、あの頃としては、珍しい研究だったのではありませんか。主観的で、勿論いい意味で主観的なんです。「私の青年期の心理である」といわれていることを、今もはっきりと記憶しています。

牛島 おっしゃる通りなんです、あれは一章の結論が同じところへいくようにして、全体をまとめたんです。

津守 客観的叙述でなく、主観と融合した形がとられていて、今も新鮮ですね。

牛島 私の興味は多方向的で色々な分野に向いました。例えば「農村の心理」をやりました。戦時中でしたけれども、文献

というものは、殆どないです。今でもあまり農村の心理はありませんけれどもね、たまたま家内の親が農学者だったもんでね。当時都会の生活に行き詰って農村へ向う時代でしたから、やったんですね。

それから「女性の心理」も書きました。自分としては冒険だったわけですね。こんなことをやって笑われやしないかという気もあるしね、「妊産婦の心理」をやったときも、研究を発表するまで恥しい気持があったですね。昭和二十一年頃でしたけれど。

津守 そうでしたか。

牛島 それから、家族の問題なんかもありましたが、その頃あまり研究がなかったわけですね。それから後も、新しい分野を転々と移りながら、くるくる回っているような感じですね。児童発達とか精薄の問題の中で、循環しながら色々なことをやったという感じですね。

仕事の三つの分野

津守 先生は新しいものをお作りになる

ことが、得意のように思いますが。

牛島 それはね、あの、要するに気が散りやすいんですね。一つことに集中しないで、飛躍する。そういう私の性質が、まあ、人の考えないことを、ひょっと思いつかべたり、早く切り換えたりすることが、そういうことになったかもしれないですね。あまり一つことに集中しないで、転換していく。小さい時から三日坊主って言われてましたね。日記なんか三日つけたらやめてしまおうしね。しかし、だんだん年をとると、三日が少し延びて、三年ぐらいは続くわけですね。一つことで精々十年でしょう、一生同じ問題をやっていくなんていうのはできません。

津守 本当にエネルギーにお仕事をなさっていらっやいましたね。

牛島 平行して仕事をしますね。一時に一つではなく、三つぐらい考えてね、同時にやっていく。プランをたてる時には重点的にやって、材料を集める段階では自分がしなくてもよくなってきましたから、今度は他の問題を考える。それからまた、或



うしじま よしとも氏

ころを中心としてやるんですよ。

それに私の頃は、まだ研究者も日本では少なかつたし、未開拓分野がたくさんあったから、思いついたことをやるのが出来たんですね。

津守 先生は、

『乳幼児精神発達検査』(昭和十一

年、愛育研究所紀要)をはじめとして沢山のテストを作っておられますが、それらは先ほどお話にありました『青年の心理』『女子の心理』などとは全く違うタイプのご研究だと思えます。先生ご自身ではどのよう

に位置づけられていますか。

牛島 ああいうテストや統計的な仕事を

すると、もの足りないような気になるというか、それで別のタイプの内面を探究する

仕事をやりたくなるんですね。

津守 そういうことですか。

牛島 私の中には、一つには、青年の心理とかのような仕事と、またテストのような客観的な仕事と、それと実際の場と三つあるんですね。

津守 先生のお仕事の三つの柱、三つの分野とでも言いますか。それは興味深いですね。

御殿場コロニーへの道

津守 三つの柱の中の一つである実践の場について、お話ししたいと思えます。先生は御殿場に精薄者のコロニーを建てられてから、ちょうど今年で二十年になりますね。

牛島 ちょうど二十年前です。どうして御殿場コロニーのようなものを作ったんだらうってことになるけれど、むしろその前に、あの子どもたちの体験がありますね。純粹に科学的研究をやるだけじゃなく、やはり子どもの幸せになるようなこと

る程度材料が集まったら他へっていうふう

に、上手に三つぐらいを一緒にする。それでどうやらある形をとるまでは、一冊の本にまとめるぐらいは続くんですね。一応まとめてしまうと、問題がなくなつて、それ以上研究を続けることがむづかしくなりま

す。同じ問題でいくより、違った問題に切り換えた方が、はるかに楽に発展するんです。転々としながら、人間の発達という

をやらなくてはならないという気が大きい
にあるわけですよ。学問は同時に人の生き
るためにならなくてはならないという考え
方は、小さい時からの宗教的な教育の成果
だと思うんですがね。

津守 精薄の子どもたちとの体験は、ど
んな形でなされたのですか？

牛島 愛育研究所は前から行っておりま
したけれど、教養部の方を引き受けるよう
になった。というのは、それまで厚生省と

つもり
ふさえ氏



文部省の援助でやっていたのが敗戦によっ
て補助がなくなつて、教養部が壊滅寸前
になった。それでつぶしちゃいけないとい
う気が私にあって、引き受けたわけです。
研究も大事だけれど、教養相談を中心とし
て、その中から教育実践をやればよいと考
えた。それで知恵遅れなども診断のしっ
なしじゃあしうがない。治療や教育もし
なけりゃあいかんと、精薄幼児の家族指導
グループを津守(豊)先生とはじめました。

また心理療法を必要とす
るものには、そういうこ
とをやるように次々に治
療室をこしらえていった
わけです。国の補助がな
くなって、つぶれようと
いう時ですから、財政的
援助はどこからも得られ
ない。自力で作るよりな
い。自分で出すといつて
も結局父兄の協力やなに
かでやるわけです。愛育
会からは金はひとつも流

れてこなくて、むしろいつも反対されるわ
けです。はじめのうちは、児童観察室を使
つて、仕事は出来ましたが、そのうち場所
が必要になってくる。建物を作るといふこ
とは、一番苦しいことですね。まあ、どうや
ら次々に作り、精薄の幼児のために舟の形
の建物をこしらえたりしました。そして初
めて愛育養護学校を作りました。ちゃんと
正式な認可を取つてね。日本における最初
の養護学校と言つていいと思います。

この養護学校は小学校だけなんだけれ
ど、その開所式の時、ある子どものおばあ
さんが言った言葉が印象的でね。「いま、
子どもたちに学校が出来たことは嬉しいけ
れど、この子どもたちが小学校を終える時
のことを思うと心配でしょうがない」と喜
びよりも心配の方を言われるんですね。そ
れでどうしても、こういう子どもの福祉教
育には死ぬまで面倒をみるといふことが必
要だといふことを強く印象づけられたんで
すね。なんとかして小学校だけでなく、そ
の後の施設を作りたい。出来たらコロニー
まで作りたいと思つたわけです。

作りたいと言っても、愛育会本部では受け入れてくれないわけですよ。きりがないから、小学校以上は他の施設へ行けばいいと言っています。それで自分がやらなければと思ったんです。その頃は精薄施設はあまりなくて、戦前に作られた滝野川学園、藤倉学園とかが残っているだけで、新しいものは殆どなかった時代です。自分で作るしかないって腹を決めましたね、どこに作るうか土地を見て回ったわけです。千葉県山村とか利根川の川ふちとか、方々見ましたが、安心して自分が住みたいような場所がなかなか見つからない。

たまたま御殿場の「青年の家」に行った時、ここなら素晴らしいという印象を受けて、「青年の家」を作るに当って努力した土地の根上さんという女の方に出会って話をしたら、非常に共鳴して下さって「土地を探してあげましょう」ということで御殿場を始められたわけです。

家庭的な施設を目ざして

津守 二十年前御殿場コロニーの開所式の先生のご挨拶を聞きまして、私は大変心を打たれました。この子どもたちの一生涯のゆりかごから墓場まで面倒をみるということと、こういう子どもたちだからこそ、物質的に恵まれたよい施設を作ってやりたいとおっしゃいました。今になれば、当り前のことかもしれませんが、その当時は大変なことだったと思います。

牛島 まあ経済的な点でいうと、やっぱり自分でやらなければ仕方がない、僅かですが自分の金を投げ出すというのが簡単ですから、そういうことで決意して始めたわけです。そうすると期待していなかったところから寄付が寄せられたりして最初の施設が出来たんですよ。

津守 国からの補助はあの時全然なかったのですか。

牛島 あの時も、あれから後も、今でもずーっと設備に対する国の援助はないです。

津守 まあ、そうなんですか！

牛島 はじめの頃は福祉法人としてやる

うと思って、書類を持って行ったんですけど、簡単に認可にならないんですね。その理由の一つは、終生施設ということを言ったからなんです。ああいう子どもは、子どものためだけでなく、家庭のため、親のためを考えなければならぬんですよ、親は自分らが死んだ後もそこに預けておけば、ちゃんと見てくれるということですから安心するんです。けれども法律で定まっている施設は社会復帰を目的とし、いずれは家庭に帰ってもらう。或いは社会に出て就職してもらおうという主旨でなければ、施設にならないわけです。それともう一つは、静岡県御殿場が非常によい場所だから、ボンと作り、小さい時から面倒を見ていた東京の子どもを連れてくる。その事は認可の条件として非常にまずいわけです。東京の子どもを静岡県に連れて来て施設を作られちゃ迷惑なわけです。それで認可にならないかった。当時は認可になったとしても措置費が九千円ぐらいでしたし、あまり得るところはないので、親が自己負担で自由契約で始めました。それから十年ぐらいでやっと

認可になったわけですが、最初の十年は苦しかったです。社会法人になって、国の援助の道が開かれ、また他の団体からの援助も来るようになりました。

津守 はじめて伺った時、富士山を背景に広い原野に建物一つあったのが、その後行くたびに施設がふえていますね。そして、興味深いことに、大きな建物のわきにブロックか何かでちょこっと小さなものがついているんですね。何かと思ったら、あれは職員の家族がふえたから、ちよっと建て増したっていうんですね。子どもたちも職員も、生きた人間が生活するために施設の方を合せていくのだと分りました。

牛島 あそこを作る時に考えたのは、家庭的であるということね。そのことが人間が生きる場として絶対必要だから、収容所ではなくて、出来るだけ家庭的な形で預からなければいけないと考えたわけです。寮長になるような人が夫婦で住み込んで、そこで赤ちゃんも生まれ、入所者たちも、保母さんたちも一緒に住む。そういうのが一つの生活の単位になっている。それをどん

どんふやす形でやってきたのです。家庭寮ですから、家庭内では男女も分けられないし、年とった人も小さい人も分けられない、ずっと一緒にやっていく。従ってあそこの職員は、住み込んで一緒に生活しなけりゃならんですよ。多くの施設では職員は通勤していて、夜は宿直がいるだけです。百人以上の施設でも夜は宿直が二、三人しかいないというのが普通なんですよ。ところがあそこでは全部いるわけです。こういう点は一つの特徴といえましょうね。しかし、今十二、三人が一つのグループになっているので、食事の時なんか二十人ぐらいになりますね、大変賑やかです。賑やかなのはいいけれど、これでは大きすぎる。こんな家庭はありませんよ。もう少し小さくしなけりゃならない。出来たら半減したいというのが今の目標です。

津守 最近「ホーム」というのを作られたと聞きますが……。

牛島 ホームっていうのは、ある程度能力のある人が、そこからよそに働きに行つて自分たちで出来るだけ自由にやれるよう

に家庭に近い形をとるように考えましてみね。ここは五人定員で、五人だけで一つ家に住んでいるわけです。能力のある人たちだから、あまり世話はないんですけれど、夫婦の人が一緒に住んでいます。それであまり騒然としていたので、五人でひっそりして寂しいなんて言っていますが、普通の家庭はこの程度でしょう。だんだんこのくらいのもに変わられたらと思っっています。

ゆりかごから天国まで

牛島 コロニーを作る時、はじめからチャベルを作るんだと宣言していたんです。結局十数年かかって、やっと作りました。チャベルを作ると言っても補助は全然ないですよ。それからキリスト教的にやるから父兄の寄付で作ったら怒る人もおろかもしれませんね。ですから全然別の形で作らなければいけませんね。僅かな金かもしれませんが、これはもう非常に大変だったんですよ。

津守 そうでしょね。

牛島 しかしああいう所にチャペルを作ったということが秘かな誇りなんです。どういう意味で誇りかというは経済の問題でなくて、あそこで終生世話をすると云っているわけで、終生ということ、逆に言うとおそこに入った人は、あそこで死んでいくということですから、死んだ時と死んでから後の世話が出来るわけです。死者のために毎日冥福を祈ることが出来るわけです。

津守 富士山を背景に三角形のチャペルがあって、中に入りますと、十字架があって、亡くなった方の名前が銅板に刻まれていますね。

牛島 普通の教会では、あの名前を残せる人は偉い人で、普通の人は出来ないんでしょうが、あそこに入った人は全部その名前を記録して、冥福を祈るといふ形をとりたいと思っています。お墓のような意味を持つわけですよ。

チャペルがあるために、世話をする態度が違ってきました。普通の病院だったら死

ぬ送世話しますけど、その後は関係ないっていう形ですよ。しかし我々は死んだ時は、あのチャペルでお通夜もし、葬式も出します。死んだ後でもつながりを持つという形がとれるんです。そういう意味で世話をすること自身にも一時的なことじゃなくて最後までということがはつきりしました。

津守 キリスト教式でやることに問題はありませんか。

牛島 大部分はキリスト教でない人がはいつているわけですがね、その場合に希望に従って仏教式で葬式をするつもりです。チャペルではなくて、体育館に祭壇をこしらえてするつもりであります。最近そういう方があったんですが、初めは親類の方が仏式をと言われましたが、後で親の方からの申し出で、チャペルでキリスト教式でして下さいというように変わってるんです。ですから、今まではずっとお葬式も教会でやってますがね強制するわけじゃないんです。強制すると靖国神社になってしまう。

(笑)

津守 はじめに、「ゆりかごから墓場まで」とおっしゃったのが、随分長いことかかって完成したことになりますね。

牛島 あれが出来て、まあどうやら八分ぐらいの出来で、完成に近づいたことになりましたね。

津守 ゆりかごから墓場までというより、ゆりかごから天国までといった方がいいですね。

牛島 そうですね。

津守 先生の生涯の中で一番楽しいお仕事は、御殿場コロニーをお作りになってからのことでしょうか。

牛島 いやー、楽しくはないですね。一番苦しかったですね。(笑)まあそりゃあ、一番苦労したからね。生きがいがあると言った意味ではそうかもしれないけれど、楽じゃなかったですね。今でも楽じゃないけれど、いつもうまくいってるとは限らないんですよ。色々な事が次々ありますからね。生命に関係した問題がありますからね。

教育の考え方

牛島 今年は、暮から四人死んでしまつたんですよ。子どもが三人と、職員まで一人事故で死んじゃつてね。今みんなしょげちゃってるんですよ。重度の人たちの命の問題は大切だつてことは知っています

が、亡くなる人は重度の人が先というわけじゃないんです。中度ぐらいの人とか、中には今まで問題なくやっていたなんていう人が、ぼつと死んでしまうんですよ。実にあつけなく。心不全なんていう診断になるけれどね。例えばこの間は、会があつて会食をしたんですよ。そこじゃあ元氣よくやつてたわけですが、済んだもんで、食器を持って自分の寮に帰つてね、そこでぼつといけなくなつちやつたんですね。一時間とかかつていないですよ。そういうような死に方が意外に多いんです。だんだん悪くなつて最後に息を引き取つたつていうのは、まだいいですけど、こちらもまさかと思うような時にぼつと亡くなる。天命という

か寿命でしようね。そういうのが大体三十歳台でね。昔は平均寿命は、こういう子の場合二十七歳ぐらいって言いましたけれど、今でもせいぜい三十何歳ぐらいじゃないかと思うんです。平均ね。

そんなに早く寿命がくることを考えると、一体彼らにはどういふ生活、どういふ教育が一番よいか考えさせられますね。彼らは色々な訓練を受けて、自分の事はでき、少し手伝いが出来るようになるには二十歳になります、二十代になつても職場で働くという事は出来ない。でも社会復帰を目ざして一生懸命教育してるわけですが、本当にちよつと仕事をしただけでおしまいになるわけです。普通教育というのは社会人として必要な基礎的なものを教えたリ、必要技術を教えて、それがすんだら卒業して社会に出て働くことが目標になる。しかしこういう子どもでは、社会に出て働くというところに目標をおいて指導する限り、何十年やつても見込みがないわけです。そういう訓練を受けなければならぬが、それだけでもう死んでしまうような人

たちなんですよ。だからそういう教育はしない方がいいんじゃないかと思ふ。厳しくしつけられて訓練を受けても、それが何もならない人のために、何でもかような教育をするのか。社会人を目標としたような教育は意味がないじゃないか。

五十年前のことになりますが、はじめて滝野川学園を見学に行つたんです。そこで大きな体の子ども(大人)たちが、小学校二、三年の国語の教科書を読んで得意になつてゐるんです。それを見て実は無駄な気がしたんですよ。あの人はいくら教えたつて新聞を読める程にはならないし、もっと他にすることがあるんじゃないか。農作業なり、体を動かすような訓練をしたりする方がいいように思ふ。けれど、そういうことをしないで、小学校のような読み方、算数をやつてね、しかも喜んでやつてるんですよ。あの子どもたちは自分で読めるという喜びを経験して、人の前で読んで聞かせて得意なんです。そういう学ぶ喜びを味わっているから、おそらくいつまでも続いているんだろうと思ふんです。小

学生の本をよみ、子どもの絵を描いて楽しむその楽しみのために勉強しながら死んでしまってもそれでいいんじゃないかってね。出来上ったものが何であらうとも、そりゃあ立派な絵が描ければそれもいいけれど、そうでなくてもよろしい。そういうような教育ならば、彼らにふさわしいと思うし、本来教育というものはそういう考え方があってよいという気がするんですね。

最近のこと

牛島 まあこのごろ生涯教育なんて言われますけれど、ちゃんと社会で働いている人、お前はだめだからもっと勉強しろという腹を立てますよ。そうじゃなくて、とにかく絶えず自分を伸ばし豊かにするために何かやることだと大いにいい。何かのための教育ではなくて、そのこと自身が楽しいからやる。結果はどうでもよろしいという考え方があの子どもたちにもふさわしいと思う。

そして同時に私自身のこの頃の生活でも

あるんです。この頃私も勉強しているんですがね、今までの仕事はあまりやりたくないんです。むしろ小さい時に一番苦手だったこと、手を使うことがいいんです。絵を描いたり字を描いたり。と言っても筆でやる気はしないんですけれど。(笑)タイプライターで毎日ラテン語の聖書を少し打って、それから同じところを英語で打っています。ラテン語の文法は全然知らないんです。が、そうするとだんだんわかるようになってくる。

津守 子どもの頃手を使うことが苦手とおっしゃいましたが、そのことを今楽しんでやっていらっしゃるのは本当にいいですねえ。

II了II

牛島先生の多くの著書・論文の中から、主なものを掲げます。

乳幼児精神発達検査 昭和11年 愛育研究所
紀要1

青年の心理 昭和15年 巖松堂

女子の心理 昭和18年 巖松堂

幼児語彙検査 昭和18年 愛育研究所紀要2

農村児童の心理 昭和21年 巖松堂

不良化傾向の早期発見 昭和23年 金子書房

教育のための標準検査 昭和24年 金子書房

小学生の心理 昭和27年 巖松堂

結婚生活の心理 昭和29年 牧書院

家族関係の心理 昭和30年 金子書房

西欧と日本の人間形成 昭和36年 金子書房

幼児総合精神検査 昭和36年 国土社

家庭教育と人間形成 昭和39年 国土社

知能判定検査 昭和47年 金子書房

養護と教育の研究(論文集) 昭和47、49年

コロニーへの道(精神薄弱児の治療教育)

シリーズ編著

精神薄弱児の治療教育(上・下)〈同〉シリーズ

ーズ

福祉の哲学と技術〈同〉シリーズ

障害児教育とコミュニケーション〈同〉シリーズ

この子らに何を学ぶか〈同〉シリーズ

以上教育と医学